お札と切手の博物館ニュース

Banknote and Postage Stamp Museum News

Contents

展覧会追録	特別展「加藤倉吉　最も多くの『顔』を彫り上げた男」より 「寄贈資料に見る加藤倉吉と三島良績氏の交流」
資料紹介	文部省図書発行許可証（教科書検定印紙）
特　　集	お札に見る君主国の肖像 イギリスとタイの事例

2021/7/1
Vol. 48

展覧会
追録

令和2年度第2回特別展「加藤倉吉　最も多くの『顔』を彫り上げた男」より

寄贈資料に見る加藤倉吉（くらきち）と三島良績（よしつぐ）氏の交流

特別展「加藤倉吉（くらきち）　最も多くの『顔』を彫り上げた男」は、新型コロナウイルス感染症に伴う緊急事態宣言、まん延防止等重点措置を受け、当初の会期を変更し、令和3年3月23日（火）～4月14日（水）まで開催しました（図1）。

加藤倉吉は、大正から昭和にかけて、お札や切手の原版彫刻に腕を振るった印刷局の工芸官（専門職員）で、部門のトップ・彫刻課長を務めた人物です。特に、戦中・戦後の混乱期には、日本のお札や切手のみならず、日本が戦地で使用するための膨大な数のお札や切手等の原版を短期間で彫り上げ、八面六臂（はちめんろっぴ）の活躍を見せました。また、退職後には、作家として自らの作品を制作したほか、法人の株券、個人の肖像版画、切手収集家向けの製品等の制作依頼に応じました。

倉吉の手掛けた数々の製品（作品）とそのエピソードからは、彫刻者としての矜持（きょうじ）と、現状に満足することなく、新たな表現技法を追求する真摯な姿勢、そして、史上最も激烈な環境下にあって厳しい任務を遂行し続けた気概等が感じられます。展示では、技だけでなく、そうした人柄にも迫ることができるよう、倉吉の姿を記録した動画や、インタビュー等で実際に語った言葉も紹介しました。

今回の展示品のうち大半を占めたのは、倉吉本人から寄贈を受けた資料です。また、著名な切手研究家である故三島良績（よしつぐ）氏（東京大学名誉教授）からの寄贈品も、倉吉の技術や多方面での活躍を知るうえで大きな助けとなりました。ここでは、これらの寄贈資料の中から、倉吉と三島氏の結びつきがわかるものをご紹介します。

図1　特別展会場風景

三島良績氏と切手コレクション①『切手集めの科学』

図2
収集家団体・切手文化会の記念品と
印面拡大図（右）
切手文化会創立二十周年記念カード
昭和39（1964）年

三島良績氏は原子力工学の権威として知られ、東京大学工学部教授として原子炉材料学、核燃料工学などの研究・教育に従事するかたわら、切手研究の世界でも第一人者として活躍され、著作も数多く残されました。当館では、三島氏の貴重な切手コレクションをご遺族からご寄贈いただき、収蔵しています。

「三島コレクション」には、切手以外の関係資料も含まれており、ここに、三島氏が収集した加藤倉吉にまつわる資料、記述等を見ることができます。三島氏の切手収集・研究のテーマは「切手の製造技術」であり、まさに印刷局の業務に係るものでした。

まずは、三島氏の著作『切手集めの科学』（昭和40年）から。本書は、製造工程を切り口として切手を解説する珍しい著作です。その第1ページ目、口絵に掲載されているのが、倉吉が彫刻した「大桜20銭切手模刻」です（図2）。

三島氏が凹版印刷の実例として取り上げた本作品は、当人が会長も務めた切手収集家団体「切手文化会」の記念品で、次のような解説文が付されています。「本会創立二十周年に因(ちな)み、日本切手の最珍品大桜20銭仮名「イ」(現存実物数枚といわれている)を元印刷局彫刻課長加藤倉吉氏の特別の御好意により模刻・製作されたものであります。」

また、同書第5章「ビュランの刀痕」にも、倉吉の作品が登場します。ここでは、版面の彫刻に用いる特殊な彫刻刀「ビュラン」を使った技法について、世界と日本の肖像切手の例を出して解説しています。いわく、「肖像切手の例のなかで、日本の野口英世切手(図3)は当時の印刷局彫刻課長であった加藤倉吉氏の彫刻になるもので、氏は人物の凹版彫刻ではきわめてすぐれた第一人者である。」

ところが、この切手は、こともあろうに倉吉本人が「重ね重ね残念だ」と振り返る仕上がりとなったものでした。当初彫刻していた切手の料額部分(5円)が、郵便料金の値上げによって変わってしまい(8円)、修正のため原版の転写を繰り返したところ、彫刻画線がくずれて、倉吉が編み出した妙味が発揮されなかったからです。三島氏は、倉吉のこの一連の不運を解説しつつ、「こういうくずれのない加藤氏のビュランのあとを示すため、氏の彫刻した斎藤実(まこと)(2・26事件当時の首相)の原版刷りを示した。」と、別途倉吉の力作(図4)を掲載し、その技へのフォローを忘れませんでした。

図3　野口英世
文化人切手　8円
昭和24(1949)年

図4　「子爵斎藤実(まこと)像」
加藤倉吉彫刻　昭和9(1934)年

②東京大学創立75年記念初日カバー関係資料

三島コレクションには、倉吉の原版製造工程を表す珍しい資料があります。三島氏が製造と発行に尽力した母校・東京大学の創立75年記念切手(昭和27年発行)に関連し、東京大学切手研究会が発行した初日カバー(図5、切手収集家向けのデザイン入り封筒)の原版彫刻を手掛けたのが倉吉でした。その製造過程で作製した原図、ゼラチンシート、原版が残っています。これらは、図案デザイナーと倉吉本人が記念として三島氏に渡したものと考えられます。

原図は、図案や文字位置の構成を決めてデザインを描いたもので、これをより具体化したのが写真原図です。倉吉は、この原図の上に透明のゼラチンシートをのせ、彫刻針で大まかな輪郭を写し取り、ベンガラ粉(赤い顔料)をつけています。このゼラチンシートを金属板(版面)にのせ、こすって跡をつけた後、この跡をたどって彫り進めていったのです(図6)。

倉吉が手掛けた製品のうち、製造工程の一連の流れを直接辿(たど)れるものは他になく、これらは唯一無二の資料といえるでしょう。

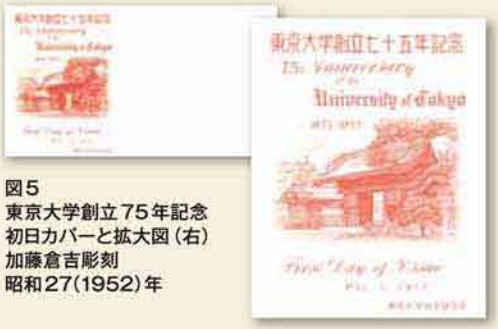

図5
東京大学創立75年記念
初日カバーと拡大図(右)
加藤倉吉彫刻
昭和27(1952)年

図6　東京大学創立75年記念初日カバー製造工程資料　左から原図、写真原図、ゼラチンシート、版面

③写真、サイン入り切手

三島氏は、日本だけでなく世界の切手製造技術にも造詣が深く、印刷局において諸外国の切手製造の現状について講演されたことがありました。また、長年にわたって切手等の郵政事業に関わり、尽力されたことから、印刷局と、数々の切手の原版彫刻に携わった倉吉とも直接交流がありました。

コレクションには、「印刷関係の方々との勉強会」と記された写真があります（図7）。昭和30年代に、印刷局幹部や関係者が三島氏の自宅に集まり、勉強会を開いていたようです。写真は三島氏が撮影したものと思われ、「加藤倉吉様」と紙焼きの裏に書き留めています。

また、三島氏は「倉吉ファン」のコレクターらしく、倉吉が彫刻を担当した切手に本人のサインをもらって保管していました（図8）。

図8　加藤倉吉サイン入り切手の一部

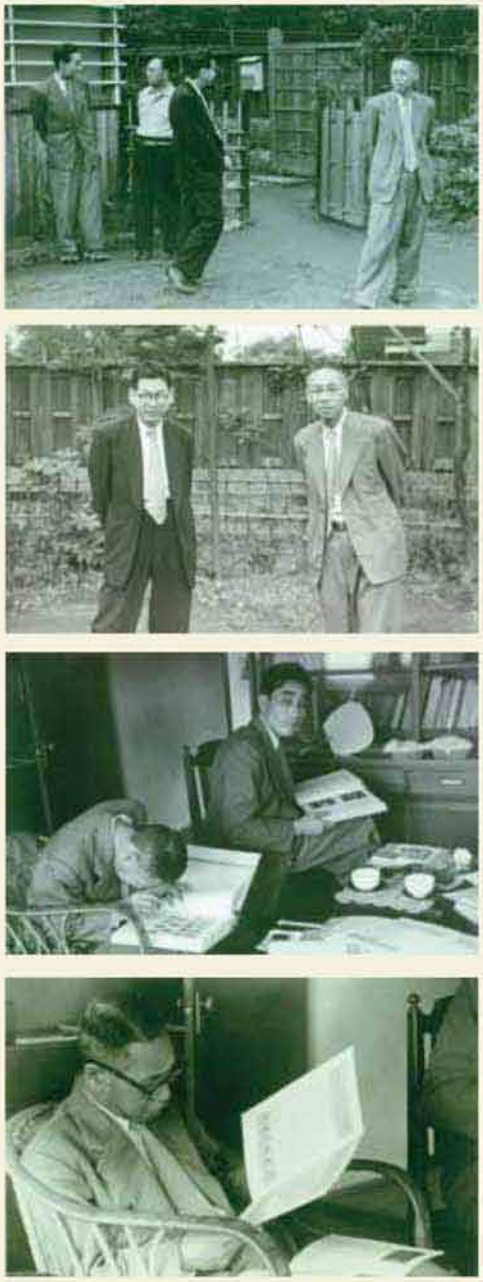

図7　写真「印刷関係の方々との勉強会」
1・2段目：三島氏ご自宅前での倉吉（右端）
3・4段目：三島氏の切手コレクションを見る倉吉（左）

倉吉の記録

一方、倉吉側の資料に三島氏に関するものがあるかどうか確認したところ、見いだすことができました。

一つは、倉吉が切手について語った言葉です。いわく「三島先生は版材や版式（印刷方式）の長所短所、版式によってどういうふうに彫り方を変えるべきか非常に研究していらっしゃる。印刷局も敬服している。」というものでした。

さらに確認できたのは、倉吉が印刷局を退職後、自身の作品の制作に係る詳細を残した「作業日誌」の中の記述です。ここには、三島氏からの依頼で肖像画を彫刻した記録がありました。記述によれば、三島氏の父・三島徳七（とくしち）氏（日本の十大発明家の一人）の肖像を昭和52（1977）年8月19日から9月8日の間に彫刻しています。続いて、三島氏ご自身の肖像も依頼され、昭和57年5月25日から7月1日の間に彫刻したようです（図9）。

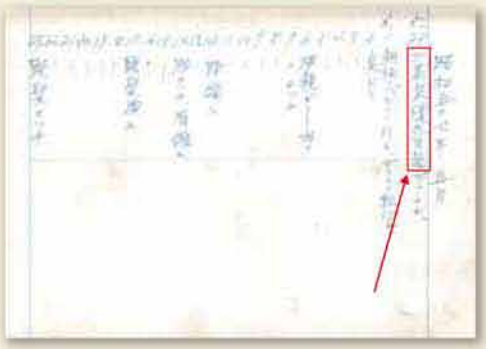

図9　加藤倉吉 作業日誌の一葉

これら三島氏・倉吉双方の資料からは、両者がお互いの知見や技術を信頼、尊敬し、技術を高めるために協力していたことが確認できました。一見関係のない資料同士と思われても、意外な結びつきが見つかることがあります。今後も、価値ある収蔵品をさまざまな角度からご紹介できるよう、調査研究を続けていきたいと思います。

（学芸員　土井 侑理子）

資料紹介 文部省図書発行許可証（教科書検定印紙）

明治36(1903)年　縦 約30㎜×横 約27㎜（下邑コレクション）

文部省図書発行許可証　紅色

上段左より、橙黄色、淡黒色、紫色
中段左より、青色、緑色、茶褐色
下段左より、嬌栗色、濃緑色、暗紫色

「文部省図書発行許可証」は文部省の教科書検定を受けている証明として、小学校用の教科書に貼付されていたものです。

教科書は、学制が頒布された明治の初め、自由発行・自由採択でした。当初一般向け図書が教科書として広く使用されましたが、児童には内容が難しかったため、各科目、児童の発達段階に応じた教科書が刊行されました。しかし、偽物の横行や、品質保証の不徹底により、文部省では明治14年には開申(届出)制、明治16年に認可制、そして明治19年には検定制と、教科書についての基準を徐々に厳しく取り締まるようになっていきました。そして明治35年に大規模な贈収賄摘発検挙が行われた「教科書疑獄事件」を契機にして、明治36年4月に小学校令を改正して国定制度が確立されました。国定制度では教科書の著作は文部省、翻刻発行と供給は民間に委ねることとなったのです。「文部省図書発行許可証」はこれを受けて発行されたものです。

明治36年9月21日付文部省告示第174号により、「文部省図書発行許可証」は尋常小学掛図用（橙黄色）、尋常小学修身書及び高等小学修身書（淡黒色）、尋常小学読本（紫色）、尋常小学書キ方手本（青色）、高等小学書キ方手本（緑色）、小学日本歴史（茶褐色）、小学地理書（嬌栗色）の教科別8種類が発行されることとなりました。なお、明治37年には、尋常小学校及び高等小学算術書（濃緑色）と、尋常小学校毛筆画手本・高等小学毛筆画手本及び尋常小学鉛筆画手本・高等小学鉛筆画手本・小学校教師用幾何画法（暗紫色）の2種類が追加されました。明治43年には紅色を共通用とし、他の種も在庫分は引き続き使用されるようになりましたが、その後は貼付するのではなく、直接教科書に印刷するようになりました。

デザインをみると、中央の円に大きく名称の「文部省圖書發行許可證」が書かれ、円の中には日本国旗、地球儀、ペン立て、三角定規とコンパス、書籍などが描かれています。

印刷局の業績を記した『印刷局沿革録』には、「明治三十六年七月二十三日　図書発行許可証原版落成ス」や、「明治三十六年十月　是月　文部省図書発行許可証用各種印色及コッピー用紫色ヲ製ス」とあり、これらの記事から印刷局がこの許可証の製造に携わっていた様子をうかがい知ることができます。

（学芸員　山田あさぎ）

お札に見る君主国の肖像
イギリスとタイの事例

博物館ニュース44号（2019/7/1）の「日本と世界のお札に見るさまざまな肖像とその変遷」において、19世紀末の帝国主義時代の欧米諸国では、国民の忠誠心や愛国心を喚起させるために国王や大統領の肖像をお札に用いてきたことなどをお伝えしました。

本稿ではイギリスとタイのお札を取り上げ、長く君主の肖像を用いてきた背景について考えてみたいと思います。

エリザベス女王の肖像

ヨーロッパで唯一君主の肖像がお札に採用されているのは、イギリスです。エリザベス女王（エリザベス2世/図1）は、現在95歳。現存する君主の中では最長の在位記録を誇り、2022年には在位70周年を迎えます。その肖像は、1960年（図2）より現在まで60年以上にわたりお札に用いられています。当初は、表面にエリザベス女王の肖像が用いられ、裏面には人物の肖像が用いられることはありませんでしたが、1970年以降は、ウィリアム・シェイクスピア、アイザック・ニュートン（図3）、フローレンス・ナイチンゲール、チャールズ・ダーウィン（図4）、ウィンストン・チャーチルといった世界的に著名な文化人や政治家が描かれるようになりました。多くの国では、お札の表面を飾る人物として、これらの肖像を用いる傾向にありますが、イギリスでは一貫してエリザベス女王の肖像を「お札の顔」として採用し続けています。これは、長い歴史と伝統を持つイギリスの君主として、絶大な影響力を持つ存在の証といえます。

また、エリザベス女王は自国イギリスだけでなく、英連邦諸国（コモンウェルス）に参加する53か国の首長でもあり、このうちカナダやオーストラリアなど15の国と地域を束ねる国家元首として、これらの国々のお札の肖像（図5～8）に描かれています。カナダでは、イギリスよりも早く（1935年）お札に登場しており、それ以来、80年にわたり採用され続けています。2015年には、エリザベス女王の歴史的統治を称え、女王への敬意を込めたものとして記念紙幣（図5）も発行されています。これは、イギリスが大英帝国として世界各国に領土を所有していた歴史的経緯を背景としたものであり、現在においてもエリザベス女王が、これらの国々と地域を束ねるシンボルであることを表すものといえます。なお、エリザベス女王のように、自国のみならず複数の国のお札の肖像に採用されているのは、他に例を見ません。

図1　イギリス　10ポンド　2017年

図2　イギリス　1ポンド　1960年

図3　イギリス　1ポンド　裏　1978年

図4　イギリス　10ポンド　裏　2000年

図5　カナダ　20ドル　2015年

図6　オーストラリア　5ドル　2016年

図7　東カリブ通貨同盟　10ドル　2012年

図8　ジブラルタル　20ポンド　2011年

プミポン前国王の肖像

また、長きにわたりお札の肖像として用いられてきた人物としてタイのプミポン前国王（ラーマ9世）を挙げることができます。プミポン前国王は、2016年に88歳で崩御するまでの70年間、タイの国王として在位し、「国の父」として国民に慕われ、絶大な支持を受けていました。

プミポン前国王は、在位中、王妃とともに国内各地に足を運びながら、土壌改良や干ばつ整備など貧しい農村地域でさまざまな開発事業を王室主導で行い（図9、10）、自ら国民と触れ合うなど（図11）真摯に公務に努める中で、国民の支持を獲得していきました。こうした姿は映画や写真などを通して国民に広く伝えられたほか、記念紙幣にも描かれるようになりました。その結果、敬愛される君主のイメージが広く国民の間に浸透していきました。このように、国のために貢献してきた君主の姿を描いたお札は、稀少な事例であるといえます。

プミポン前国王は、タイ王室のイメージを一代で築き上げたともいわれています。タイのお札にその肖像が長く用いられ続けてきた理由には、こうした歴史的背景があります。

（学芸員　佐藤さおり）

図9　タイ　500バーツ　裏　1996年

図10　タイ　500バーツ　裏　2017年

図11　タイ　60バーツ　裏　1987年

150年前の切手と現在の切手
左：100文　明治4（1871）年
右：84円　令和元（2019）年

日本の切手が生まれたのは、今からちょうど150年前のことです。その間、切手のデザイン、技術は、世の中の動きや技術の発展を受けて変化し続けてきました。

本展では、切手誕生150年を記念し、改めて切手の基本情報を紹介するほか、古今東西の切手の移り変わりや珍しい切手を取り上げます。切手を知らないお子さんから、切手に関心のある大人の方まで幅広くお楽しみいただけるよう、切手の歴史とその魅力をご紹介します。

切手の小さな紙片に込められた技術、美を通して、歴史とともに移り変わるさまざまな姿をお楽しみください。

また、夏休みの自由研究にもご活用いただけます。

左：トイレットペーパー製の切手
オーストリア　275+275セント
2020年
右：ルーペ付き切手
スペイン　4ユーロ　2020年

※やむを得ず会期や開館時間を変更する場合があります。詳しくはホームページをご覧いただくか、電話にてお問い合わせください。

ご利用案内

入館無料

開館時間：9:30-17:00
休 館 日：月曜日（祝日の場合は翌平日）
年末年始、臨時休館日
※やむを得ず開館時間等を変更する場合があります。詳しくはホームページをご覧いただくか、電話にてお問い合わせください。

独立行政法人 国立印刷局
お札と切手の博物館
〒114-0002 東京都北区王子1-6-1
TEL.03-5390-5194
https://www.npb.go.jp/ja/museum/
お札と切手の博物館　検索

交通

JR京浜東北線「王子駅」（中央口）下車 徒歩3分
東京メトロ南北線「王子駅」（1番出口）下車 徒歩3分
都電荒川線（東京さくらトラム）「王子駅前」下車 徒歩3分
＊駐車場はありません。

常設展

偽造防止技術の歴史―印刷技術・製紙技術
偽造防止技術体験コーナー（休止）
重要文化財 スタンホープ印刷機
お札の移り変わり/世界のお札/
切手の移り変わり/世界の切手/
国立印刷局の歴史/世界のめずらしいお札/
お札の芸術（休止）
＊特別展開催時は一部展示の変更があります。

発　行：お札と切手の博物館（国立印刷局博物館）
発行日：令和3年7月1日
©2021
本書掲載の内容を許可なく複写、複製、転載することを禁じます。

※この冊子は再生紙を使用しています。